

公共図書館の利用者における来館目的に関する研究

— A市図書館の利用者アンケート調査をもとに —

A Study of Public Libraries Users' Purpose of Visit

—Based on a User Questionnaire Survey Conducted at a Japanese City Library—

長谷川哲也¹, 内田良², 上地香杜³

HASEGAWA Tetsuya¹, UCHIDA Ryo², KAMIJI Koto³

| | |
|------------------|---|
| [キーワード Keyword] | 公共図書館, 滞在型図書館, 利用者アンケート, 来館目的 |
| [所属 Institution] | ¹ 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University), ² 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 (Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University), ³ 静岡大学教職センター (Center for Professional Development of Teachers, Shizuoka University) |

[要 旨 Abstract] 本研究の目的は、公共図書館の利用実態や各種サービスの認知およびニーズを、利用者の来館目的に沿って明らかにすることで、今日の図書館という場が利用者によってどのように創り上げられているのかを考察することである。この目的を達成するため、A市図書館から提供を受けた2018年実施「図書館利用者アンケート調査」の個票データを分析した。分析の結果から明らかとなった重要な知見は次の二点である。第一に、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」は、それぞれの来館目的に合わせた利用実態の特徴はあるものの、それほど大きな違いが生じているわけではなく、両者は“似通った・隣接する”利用者ということである。第二に、新しいサービスを楽しんでいるであろう「その他の目的も含む利用者」は、資料の閲覧や貸出といった従来型のサービスにも関心が高いということである。このように、利用者目線で図書館をみると、利用者が求めるのは決して従来型のサービスと新しいサービスの二者択一ではなく、単純に機能分化が望まれているわけではないだろう。

1. 問題意識—利用者目線の徹底

本研究の目的は、公共図書館（以下、図書館）の利用実態や各種サービスの認知およびニーズを、利用者の来館目的に沿って明らかにすることである。イベントの開催や飲食の提供まで、多様なサービスが展開される今日の図書館では、利用者の来館目的も一様ではない。つまり、図書館が単に本の貸出に留まらない場所へと変貌しつつあるからこそ、利用者が「何のために図書館に足を運ぶのか」という問いが成立し、そこを出発点として図書館の実像に迫るという発想が生まれる。本研究は、今日の図書館という場が、利用者によってどのように創り上げられているのか、を考察するものである。

図書館は、生涯学習の中核を担う教育機関として、地域住民を対象に物的・人的資源を提供して「個人の知」を豊かにするという機能を有しており、その「個人の知」が集合することで「公共の知」へと変換され、当該地域における新たな教育・情報資源の需要を高めていく。これまで筆者らのグループは、「公共の知」の地域間格差の実態を明らかにすべく、図書館の資源格差に着目した研究を蓄積してきた。そこで明らかとなったことは、図書館への資源投入が、自治体の人口規模といった「体力」を如実に反映し、格差が生じているという事実である（内田ほか 2017）。

ただし、図書館にどれだけ蔵書があっても、どれだけ職員が配置されていても、これら資源が利用されないことには、真の意味で「個人の知」や「公共の知」は産出されない。つまり、どれだけ図書館の資源があっても、人々が利用することまで保証しているわけではないことから、資源格差をそのまま利用格差と読み替えることはできないのである。だからこそ、「公共の知」やその格差の実態に迫るためには、図書館が備える資源という図書館目線の分析だけではなく、当該地域の住民が図書館をどのように利用しているのか、どのようなニーズが存在するのかという、利用者目線での分析が不可欠である。

こうした利用者目線の重要性は、図書館機能の変化と、「場としての図書館」の議論をみることで、より徹底される。

1-1. 図書館機能の変化

図書館建築の観点から図書館機能の変遷を論じた植松(2014)によれば、これまでわが国の図書館は、高校生や受験生などが勉強するために訪れる「勉強部屋図書館の時期(1950年代)」, 資料提供がサービスの中心となった「貸出サービスの発展期(1960~70年代)」, 図書館の大規模化・高機能化や複合施設型図書館が登場した「ニーズとサービスの多様化時代(1980年代)」, インターネットを介したオンラインサービスが発展した「ICT活用サービスの進展期(1990年代半ば以降)」のように、時代に応じた機能を備えてきたという。とりわけ1990年代以降は、従来のような資料の貸出が中心業務である「貸出型図書館」から、図書館の大規模化・高機能化やICT活用を伴う新たな発展モデルとして「滞在型図書館」が登場する。

「滞在型図書館」は、北欧の図書館のように、読書や他の図書館サービスを楽しみ、館内で長時間過ごすことができる場としての機能を備えている(植松 1995)。例えば、飲食や談話ができるスペースが設けられていたり、文化芸術や子育てに関するワークショップが開催されていたり、ビジネスや市民生活の相談窓口が設けられていたりなど、利用者のニーズに応じたサービスが様々な展開されている⁽¹⁾。また、こうしたサービスを提供するための図書館建築にも趣向が凝らされ、利用者にとって居心地よい空間づくりが目指されている(日本図書館協会 2009)。このように「滞在型図書館」は、利用者がそれぞれの来館目的を満たし、かつ快適に過ごすことができる“新たな居場所”となっているのである。

利用者の多様なニーズに応じる「滞在型図書館」へと転換することで期待されるのが、図書館の「第三の場」としての機能である。「第三の場」とは、オルデンバーグが著書『The Great Good Place』で説いた、第一の家、第二の職場に続く、インフォーマルな公共の集いの場であり、コミュニティの構築に重要な役割を果たす。オルデンバーグ(訳書, 2013)は「第三の場」の特徴として、全ての人にとって中立の領域であること、人々を社会的平等の状態にすること、会話を主な活動とすること、利用しやすいこと、常連のような仲間がいること、建物としては目立たないこと、遊び心に満ちた雰囲気があること、もう一つのわが家という感覚があること、の8つを挙げている。これらのうち、会話を主な活動とするという特徴は、会話が禁じられてきた図書館の原則に合致しないことから、オルデンバーグ自身は図書館を「第三の場」として示していないという(吉田・川崎 2009)。しかしながら上述のように、今日の「滞在型図書館」では、会話も含めて利用者が各々の目的を果たすために自由に活動する場となっており、オルデンバーグのいう「第三の場」に近づきつつある。

図書館を「第三の場」として位置づけ、コミュニティや社会関係資本を創出する機能に焦点をあてた研究もみられる。例えばマッケンシーほか(訳書, 2008)は、カナダの公立図書館のプログラム室で実施された女性のお話会と編み物グループの集まりを観察し、図書館というスペースの意義やそこで展開される人間関係を分析した。その結果、利用者が多種多様に使うことで図書館は狭く私的なスペースとして機能していること、プログラム室での活動が利用者の生活として起こっていること、などを明らかにした。図書館を「第三の場」として捉えた研究的知見は、主体的に図書館を使う利用者に焦点を当てることでコミュニティでの図書館の機能や役割を理解する「利用者の生活の中での図書館」(ウィーガンド 訳書, 2012)というアプローチの重要性を示唆するものである。

1-2. 「場としての図書館」論

図書館の機能が「貸出型」から「滞在型」へと移行するに伴って、図書館研究で注目されてきたのが「場としての図書館」論である。

これまでの図書館研究では、物理的な「場所」のあり方や、図書館が「場所」として有する機能や役割など、「場所としての図書館」が活発に議論されてきた。根本(2013)は「場所としての図書館」研究が、「建てられている地域の特性、建築様式や建築物としての審美的特性、規模や内部構造、収蔵される資料の特性と配置、といった場所としての固有性を表現」(p.55)するものであるという。とりわけ近年では、「電子

図書館」の登場など、物理的な「場所」としての存在意義が問い直されていることから、図書館が提供する建築物や所蔵資料のあり方を論じることで、場所性の維持を図るという狙いもある（常川・小野 2017）。こうした研究の成果として久野（2014）は、図書館の建物や施設・設備等の機能や役割を再評価し、図書館の環境整備やサービス改善に直接貢献すると述べている。

他方で久野（2014）は、従来の「場所としての図書館」研究が、建築家の意匠や図書館運営側からの視点が強調され、そこで論じられるのは図書館の制度・経営論や教育論といった啓蒙的な性格を有すること、すなわち「上からの視点」による考察であると指摘する。そのうえで、「場所としての図書館」論と対比的に久野が提示するのが、「場としての図書館」論である。久野（2014）は、地理学や社会学などの「場」に関する議論を援用しながら、「場としての図書館」研究を、「職員や環境や情報資源が作り出す包括的な図書館という『場』と、さまざまな利用者の能動的で生命力あふれる日常『生活』実践との間のダイナミックな相互作用、そして、そこから創出される『実存空間』を動的に把握しようとする」（p.282）新しい図書館研究であり、それは利用者側からの「下からの視点」によって考察されるものとしている。図書館を「場」と「実践」が相互作用する空間として捉え、利用者の日常生活から図書館の機能や役割を解明しようとする「場としての図書館」論は、利用者の視点から多様で複雑に創出される図書館のあり様を豊かに描き出すことが期待される。

1-3. 本研究の課題設定

上述では利用者目線を徹底させるために、図書館機能の変化と、「場としての図書館」論を整理してきた。ここで浮かび上がってきた論点は、次の二つである。第一に、図書館の機能が「貸出型」から「滞在型」へと移行している今日の図書館には、資料の閲覧や貸出など従来型のサービスと、利用者のニーズを満たして快適に過ごすための新しいサービスが、複雑なバリエーションをもちながら混在している。第二に、今日の図書館が利用者のニーズに応じて多様な機能を有しているとすれば、その実態を捉えるためには、図書館運営側からの「上からの視点」ではなく、人々が日常生活の中で図書館をどのように利用しているのか、つまり利用者側からの「下からの視点」で捉える必要がある。以上を踏まえ、本研究では次の課題を設定する。

- ① 人々の生活と図書館との関係から利用実態を捉え、利用者の視点から各種サービスの認知やニーズを把握する。
- ② 従来型のサービスと新たなサービスそれぞれを享受する人々、すなわち利用者の来館目的に沿って実態を明らかにする。

本研究では、図書館の利用実態や各種サービスの認知およびニーズを、利用者の来館目的に沿って明らかにすることで、今日の図書館という場が利用者によってどのように創り上げられているのかを考察する。

2. 本研究で用いるデータの概要

本研究では上述の目的を達成するため、X県A市が設置する公共図書館（以下、A市図書館）で実施された「図書館利用者アンケート調査」のデータを分析する⁽²⁾。A市は人口10万人以上の中都市⁽³⁾であり、X県内では大規模な都市ではあるものの、全国的には平均的な規模の都市となっている。本研究がA市図書館を対象とした理由は、資料の閲覧や貸出といった従来型のサービスが充実している一方で、子育て関係のイベントや郷土資料の講座といった新しいサービスも数多く取り入れており、利用者目線の図書館運営が実践されていると映るからである。A市図書館の利用者は、それぞれの来館目的を満たすなかで、図書館をどのように認識しているのだろうか。「図書館利用者アンケート調査」を分析することで、本研究課題を明らかにしたい。

A市図書館では「図書館利用者アンケート調査」を毎年実施しており、調査票では、回答者の属性（年齢、性別、居住地区）、図書館への来館頻度、図書館への来館方法、図書館までの所要時間、図書館での滞在時間、図書館の利用目的、図書館利用の満足度、月間読書冊数やそのうちの図書館の本の割合、蔵書の満足度、図書館サービスの認知度、図書館に希望することを尋ねている。調査の実施方法は、基本的には図書館職員

が来館者に直接手渡しで調査票を配付・回収している。調査期間は3週間程度設けられており、回答は一人一回であることを調査票に明記することで調査期間中に一人が複数の回答をしないようにしている。本研究では、A市図書館から提供を受けた2018年実施「図書館利用者アンケート調査」の個票データを分析する。なお、この調査票の回収数は467となっており、配付した調査票数が不明なため、回収率は算出されていない。

3. 来館目的別の分析

ここでは、A市図書館の「図書館利用者アンケート調査」のデータを用いて、図書館の利用実態や各種サービスの認知およびニーズを、利用者の来館目的に沿って分析する。

表1 利用者の来館目的

| | N | % |
|-------------------------|-----|------|
| 本や雑誌を借りるため | 447 | 95.7 |
| 本や新聞、雑誌を読むため | 99 | 21.2 |
| C D、ビデオを借りるため | 35 | 7.5 |
| 映画や音楽を鑑賞するため | 0 | 0.0 |
| 調べ物をするため | 74 | 15.8 |
| 学校の勉強や受験勉強等をするため | 20 | 4.3 |
| 展示をみるため | 22 | 4.7 |
| 各種の講座や読み聞かせなどの行事に参加するため | 31 | 6.6 |
| その他 | 7 | 1.5 |

注1) %は回収数の467に対する値で、各項目は複数回答可となっている。

表2 サービス分類による利用者の来館目的

| | N | % |
|--|-----|------|
| 本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者 (従来型のサービスに特化した利用者) | 318 | 68.1 |
| その他の目的も含む利用者 (様々なサービスを求める利用者) | 149 | 31.9 |

注1) %は回収数の467に対する値である。

スと新しいサービスが複雑なバリエーションをもちながら混在しており、利用者が享受するサービスの組み合わせは単一ではない。ここで留意しなければならないのは、図書館は本や雑誌といった資料が置いてあることが大前提であり、資料の閲覧や貸出を放棄しているわけでもなく、単に遊園地化しているわけでもない、ということである。すなわち、図書館に来館する以上、新しいサービスを求めている人々も、貸出や閲覧といった従来型のサービスを同時に求めていることが十分に仮定できる。そこで来館目的を、①従来型のサービスに特化した利用者として、「本や雑誌を借りるため」もしくは「本や新聞、雑誌を読むため」のいずれか一つあるいは両方のみを選択した者と、②様々なサービスを求める利用者として、それ以外の項目も選択した者(回答の単数・複数は問わない)に分類する。その結果を示した表2をみると、A市図書館の利用者は、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」(68.1%)がおおよそ3分の2、「その他の目的も含む利用者」(31.9%)がおおよそ3分の1であることがわかる。以下では、来館目的によって「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」に2分類し、図書館の利用実態や各種サービスの認知およびニーズの違いを分析する。

3-1. 来館目的別の利用実態

ここでは、来館目的別の2分類による図書館の利用実態を分析する。

表3は、来館目的別に性別と年代を示したものである。性別は来館目的による差はみられず、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」はいずれも、「男性」が40%弱で「女性」

まず、表1からA市図書館の利用者の来館目的をみてみよう。ほとんどの利用者の来館目的は「本や雑誌を借りるため」(95.7%)であり、「本や新聞、雑誌を読むため」(21.2%)が続いていることから、利用者の多くは資料の閲覧や貸出といった従来型のサービスを目的として来館していることがわかる。他方で、わずかではあるものの、「各種の講座や読み聞かせなどの行事に参加するため」(6.6%)や「展示をみるため」(4.7%)といった、新しいサービスを目的として来館している利用者も存在する。

上述のように、「貸出型」から「滞在型」へと移行している今日の図書館には、従来型のサービ

表3 来館目的別の性別と年代

| | | 本や雑誌等を借りる・ 読むだけの利用者 | その他の目的も 含む利用者 |
|----|--------|------------------------|------------------|
| 性別 | 男性 | 39.0% | 36.7% |
| | 女性 | 61.0% | 63.3% |
| N | | 318 | 147 |
| 年代 | 10～20代 | 10.7% | 11.6% |
| | 30～40代 | 29.6% | 38.8% |
| | 50～60代 | 43.1% | 29.9% |
| | 70代以上 | 16.7% | 19.7% |
| N | | 318 | 147 |

注1) カイ二乗検定の結果, + p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001である。

注2) 数値の網掛けは, 調整済み残差の絶対値が1.96を超える部分である。

が60%強となっている。一方、年代は来館目的による差が生じており、調整済み残差の絶対値が1.96を超える部分に注目すると、「30～40代」は「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」が29.6%に対して「その他の目的も含む利用者」が38.8%、「50～60代」は「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」が43.1%に対して「その他の目的も含む利用者」が29.9%となっている。

表4は、来館目的別に図書館の利用状況を示したものである。来館頻度は来館目的による差はみられず、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」はいずれも、「2週間に1回ぐらい」が50%弱と最も多くなっている。来館方法も来館目的による差はみられず、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」はいずれも、「自動車（自分で運転）」が60%前後と最も多くなっている。図書館までの所要時間も来館目的による差はみられず、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」はいずれも、「10～20分ぐらい」が40～50%程度と最も多くなっている。一方、図書館での滞在時間は来館目的による差が生じており、調整済み残差の絶対値が1.96を超える部分に注目すると、「30分未満」は「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」が32.2%に対して「その他の目的も含む利用者」が20.0%、「1時間以上」は「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」が12.9%に対して「その他の目的も含む利用者」が24.1%となっている。

表4 来館目的別の図書館利用状況

| | | 本や雑誌を借りる・ 読むのみの利用者 | その他の目的も 含む利用者 |
|----------------|------------|-----------------------|------------------|
| 来館頻度 | 1週間に1回以上 | 15.2% | 21.6% |
| | 2週間に1回ぐらい | 49.7% | 49.3% |
| | 1ヵ月に1回ぐらい | 16.5% | 12.2% |
| | 1ヵ月に1回未満 | 18.7% | 16.9% |
| N | | 310 | 148 |
| 来館方法 | 徒歩 | 7.2% | 9.3% |
| | 自転車 | 13.4% | 21.7% |
| | 自動車（自分で運転） | 62.1% | 56.6% |
| | 自動車（運転に同乗） | 17.2% | 12.4% |
| N | | 290 | 129 |
| 図書館までの 所要時間 | 10分以内 | 33.7% | 38.1% |
| | 10～20分ぐらい | 51.1% | 44.9% |
| | 20分以上 | 15.2% | 17.0% |
| N | | 315 | 147 |
| 図書館での 滞在時間 | 30分未満 | 32.2% | 20.0% |
| | 30～1時間ぐらい | 55.0% | 55.9% |
| | 1時間以上 | 12.9% | 24.1% |
| N | | 311 | 145 |

注1) 来館方法のうち「バス・タクシーなどの公共交通機関」と「電車」は回答数が少なかったため、分析から除外した。

注2) カイ二乗検定の結果, + p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001である。

注3) 数値の網掛けは, 調整済み残差の絶対値が1.96を超える部分である。

表5は、来館目的別に読書の状況を示したものである。月間読書冊数は来館目的による差はみられず、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」はいずれも、「2冊～5冊」が45%前後と最も多くなっている。一方、図書館の本の割合は来館目的による差が生じており、調整済み残差の絶対値が1.96を超える部分に注目すると、「図書館の本がほとんど」は「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」が53.2%に対して「その他の目的も含む利用者」が40.3%、「図書館の本が半分以下」は「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」が19.6%に対して「その他の目的も含む利用者」が30.9%となっている。

表5 来館目的別の読書の状況

| | | 本や雑誌を借りる・ 読むのみの利用者 | その他の目的も 含む利用者 |
|-------------------|---------------|-----------------------|------------------|
| 月間読書冊数 | 1冊以下 | 10.2% | 9.5% |
| | 2冊～5冊 | 43.8% | 46.6% |
| | 6冊～10冊 | 26.7% | 20.9% |
| | 11冊以上 | 19.4% | 23.0% |
| N | | 315 | 148 |
| 図書館の本の 割合 * | 図書館の本がほとんど | 53.2% | 40.3% |
| | 図書館の本が4分の3ぐらい | 27.2% | 28.9% |
| | 図書館の本が半分以下 | 19.6% | 30.9% |
| N | | 316 | 149 |

注1) 月間読書冊数の「1冊以下」は、「ほとんど読まない」と「1冊」に回答した%である。

注2) 図書館の本の割合とは、読む本のうち図書館の本が占める割合を尋ねている。

注3) カイ二乗検定の結果、+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001である。

注4) 数値の網掛けは、調整済み残差の絶対値が1.96を超える部分である。

以上、来館目的別にA市図書館の利用実態を分析すると、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」はともに、女性がやや多く、概ね2週間に1回程度は来館しており、図書館まで20分程度の距離に住んでいる、という利用者像が浮かび上がる。ただし、違いが生じている項目をみると、両者の特徴もみえてくる。すなわち、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」は、年代でいうと50～60代（いわゆるミドル～シニア世代）が多く、図書館での滞在時間は比較的短く、図書館の本への依存は高い傾向にある。一方、「その他の目的も含む利用者」は、年代でいうと30～40代（いわゆるゆ子育て世代）が多く、図書館での滞在時間は比較的長く、図書館の本への依存はやや低い傾向にある。

3-2. 来館目的別のサービス認知と図書館へのニーズ

ここでは、来館目的別の2分類による図書館のサービス認知とニーズを分析する。

表6は、来館目的別に図書館のサービス認知（知っているサービスや利用・参加したことがあるサービス）を示したものである。これをみると、総じて、資料の閲覧や貸出といった従来型のサービスに対する認知は比較的高い傾向にある。そのうえで、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」を比較すると、「相互貸借サービス」「自動音声応答サービス」「児童向け読み聞かせ会」「乳児（親子）向け読み聞かせ指導」「乳幼児向け読み聞かせ会」「親子で楽しめる行事（手作りおもちゃ、科学あそびなど）」「福祉サービス（対面朗読など）」「所蔵品展」では有意差が生じており、いずれも「その他の目的も含む利用者」の認知が高い。

表7は、来館目的別に図書館へのニーズを示したものである。これをみると、総じて、図書館の利便性や資料に対するニーズが比較的高い傾向にある。そのうえで、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」を比較すると、「資料が豊富にあること」「専門的な資料が整備されていること」「資料紹介、読書相談の充実」「職員の専門性」では有意差が生じており、いずれも「その他の目的も含む利用者」のニーズが高い。

以上、A図書館のサービス認知とニーズを分析すると、相対的には、資料の閲覧や貸出といった従来型の

サービスに対する認知やニーズが高いことがわかる。また、利用目的別に比較すると、「その他の目的も含む利用者」は「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」に比べて、資料の貸出から子育て関係のイベントなどの幅広いサービスを認知しており、資料に関連するニーズや職員の専門性へのニーズなどが高いといえる。

表6 来館目的別のサービス認知

| | 本や雑誌を借りる・ 読むのみの利用者 | その他の目的も 含む利用者 | |
|-----------------------------|-----------------------|------------------|---|
| 予約サービス | 87.1% | 87.2% | |
| 相互貸借サービス | 52.8% | 65.1% | * |
| 自動音声応答サービス | 6.3% | 13.4% | * |
| パソコンなどを利用したインターネットによる資料検索 | 62.9% | 60.4% | |
| パソコンなどを利用したインターネットによる予約サービス | 57.9% | 57.7% | |
| 予約図書配本サービス | 42.1% | 42.3% | |
| 電子図書館（電子書籍貸出） | 7.5% | 12.1% | |
| 児童向け読み聞かせ会 | 33.3% | 42.3% | + |
| 児童向け工作会 | 5.3% | 7.4% | |
| 乳児（親子）向け読み聞かせ指導 | 19.2% | 27.5% | * |
| 乳幼児向け読み聞かせ会 | 21.4% | 28.9% | + |
| 市民団体による読み聞かせ会 | 7.5% | 8.7% | |
| 親子で楽しめる行事（手作りおもちゃ、科学あそびなど） | 10.4% | 16.8% | + |
| ふるさと講座や古文書講座 | 11.3% | 16.8% | |
| 福祉サービス（対面朗読など） | 2.5% | 6.0% | + |
| 所蔵品展 | 6.3% | 13.4% | * |
| 職場体験・インターンシップ | 14.2% | 18.8% | |
| 開館時間や開館日の情報 | 42.5% | 50.3% | |
| N | 318 | 149 | |

注1) 数値はA市図書館で実施しているサービスのうち、知っているサービスや利用・参加したことがあるサービスと回答された%をあらわす。

注2) カイ二乗検定の結果、+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001である。

表7 来館目的別の図書館へのニーズ

| | 本や雑誌を借りる・ 読むのみの利用者 | その他の目的も 含む利用者 | |
|--------------------|-----------------------|------------------|----|
| 身近な場所に図書館があること | 63.8% | 61.1% | |
| 開館時間の延長 | 12.6% | 14.1% | |
| 休館日を少なくすること | 18.9% | 14.8% | |
| 資料が豊富にあること | 43.4% | 51.7% | + |
| 専門的な資料が整備されていること | 16.0% | 29.5% | ** |
| 資料検索がかんたんなこと | 28.9% | 35.6% | |
| 借りられる冊数が10冊以上であること | 10.7% | 13.4% | |
| 借りられる期間が15日以上であること | 24.5% | 27.5% | |
| 資料紹介、読書相談の充実 | 9.1% | 19.5% | ** |
| 図書館資料以外の様々な情報の提供 | 6.0% | 8.7% | |
| 講座や展示会、イベントなどの充実 | 15.4% | 20.8% | |
| 職員の専門性 | 8.2% | 14.1% | * |
| ICTを活用したサービス | 3.8% | 6.0% | |
| 県立図書館の遠隔地返却サービス | 20.8% | 23.5% | |
| N | 318 | 149 | |

注1) カイ二乗検定の結果、+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001である。

4. 結語

ここまで本研究では、A市図書館の「図書館利用者アンケート」を用いて、図書館の利用実態や各種サービスの認知およびニーズを、利用者の来館目的別に分析してきた。図書館の機能が「貸出型」から「滞在型」へと移行している今日、A市図書館という限定された事例ではあるものの、本研究で明らかとなった重要な知見は、次の二点である。第一に、「本や雑誌等を借りる・読むだけの利用者」と「その他の目的も含む利用者」は、それぞれの来館目的に合わせた利用実態の特徴はあるものの、それほど大きな違いが生じているわけではなく、両者は“似通った・隣接する”利用者ということである。第二に、新しいサービスを楽しんでいるであろう「その他の目的も含む利用者」は、資料の閲覧や貸出といった従来型のサービスにも関心が高いということである。これらの事実から利用者目線で図書館をみると、利用者が求めるのは決して従来型のサービスと新しいサービスの二者択一ではなく、単純に機能分化が望まれているわけではないだろう。

これらを踏まえて最後に、本研究の冒頭で論じた格差について触れておく。財政のひっ迫によって限られた予算で運営される図書館では、利用者の多様なニーズを満たすため、「貸出型」から「滞在型」を掛け声に、予算配分を従来型のサービスから新しいサービスへと振り替えていくかもしれない。一見すると利用者目線のシフトのようであるが、実はこれが、資源格差と利用格差の両方を生み出す可能性を含んでいる。すなわち、予算が潤沢な図書館は従来型のサービスと新しいサービスの両方を充実させられるが、予算が厳しい図書館は従来型のサービスを削らざるを得なくなり、とりわけ図書や雑誌といった資源格差が生じることとなる。他方で利用者は、「滞在型」へ移行したからといっても、新しいサービスのみを楽しんでいるわけではなく、従来型のサービスも（かなり強く）追求していることから、図書や雑誌といった資源格差が生じれば、そのまま利用格差へとつながることとなる。利用者目線＝「滞在型」＝新しいサービスという構図にばかり目を奪われると、従来型のサービスで生じる資源格差と利用格差を見逃すことになるだろう。

〔付記〕

本研究のために「図書館利用者アンケート調査」の個票データを提供していただいたA市図書館には厚く御礼申し上げます。なお本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「『都市』と『地方』における公共図書館の資源格差とその推移に関する研究」（研究課題/領域番号：18K02412，研究代表者：長谷川哲也）による研究成果の一部である。

〔注〕

- (1) 例えば、文部科学省が2012年に示した「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」では、公立図書館のサービスとして、貸出サービス、情報サービス、地域の課題に対応したサービス、利用者に対応したサービス、多様な学習機会の提供、ボランティア活動等の促進が挙げられており、具体的なサービスとしては、仕事や職能開発を支援するための情報提供、子育てを支援するための講座や展示会の実施、学習活動を支援するための講座や相談会の実施などがある（文部科学省 2012）。また河本・辻（2018）によれば、武蔵野市図書館「武蔵野プレイス」をはじめ「滞在型図書館」が広まるなか、同研究の調査対象となった公共図書館の50%超で飲み物あるいは食べ物が許可されているという。
- (2) 本研究は、公共図書館における利用者アンケート調査を分析した上地ほか（2021）と一連の研究であり、この研究と同じ調査データを用いることとする。なお、上地ほか（2021）では主に属性によるサービス認知の違いを扱ったが、本研究では利用者の来館目的に焦点を当てた分析を行う。
- (3) 総務省の『地方財政の状況』では、都市のうち、政令指定都市、中核市、施行時特例市以外の人口10万以上の都市を「中都市」として定義している（総務省 2021）。

〔参考文献〕

上地香杜・長谷川哲也・内田良，2021，「公共図書館の利用者におけるサービスの認知に関する研究—市立図書館のアンケート調査をもとに」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第67巻第

- 2号, pp.97-107.
- 河本毬馨・辻慶太, 2018, 「図書館内の飲食可否に関する実態調査」『Library and information science』No.79, pp.85-107.
- 久野和子, 2014, 「新しい批判的図書館研究としての『場としての図書館』("Library as Place") 研究—その方法論を中心にした考察」『図書館界』Vol.66, No.4, pp.268-285.
- 文部科学省, 2012, 「図書館の設置及び運営上の望ましい基準(平成24年12月19日文部科学省告示第172号)」(https://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1282451.htm 最終アクセス日: 2021年8月26日)
- 根本彰, 2013, 「『場所としての図書館』再考」『現代の図書館』Vol.51, No.2, pp.51-60.
- 日本図書館協会, 2009, 『第31回図書館建築研修会 来館を促す建築的魅力—日来館型利用が増える中で“場としての図書館”を考える』
- Pamela J. Mackenzie, Elena M. Prigoda, Kirsten Moffatt and Lynne (E.F.) McKechnie, 2006, “Behind the Program-Room Door: The Creation of Parochial and Private Women’s Realms in a Canadian Public Library,” John E. Buschman and Gloria J. Leckie eds., *The Library as Place: History, Community, and Culture*, Libraries Unlimited, pp.117-134, (=2008, 「プログラム室の扉の内側—カナダ公立図書館における狭く私的な女性領域の創造」川崎良孝・久野和子・村上加代子訳『場としての図書館—歴史, コミュニティ, 文化』京都大学図書館情報学研究会, pp.173-198.)
- Ray Oldenburg, 1989, *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community*, Da Capo Press. (=2013, 忠平美幸訳『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地の良い場所」』みすず書房。)
- 総務省, 2021, 『地方財政の状況』(https://www.soumu.go.jp/main_content/000738627.pdf 最終アクセス日: 2021年8月26日)
- 常川真央・小野永貴, 2017, 「記憶するラーニング・コモンズ—『電子図書館』と『場所としての図書館』を接合する図書館像の提案」『大学図書館研究』107号, pp.1702 1-7.
- 内田良・長谷川哲也・上地香杜, 2017, 「公共図書館の地域間格差—『日本の図書館: 統計と名簿』2016年版のデータを用いた二次分析」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第64巻第1号, pp.169-179.
- 植松貞夫, 1995, 「滞在型図書館」『建築雑誌』Vol.110, No.1370, pp.44-45.
- 植松貞夫, 2014, 『図書館施設論』樹村房。
- Wayne A. Wiegand, 2011, *Main Street Public Library: Community Places and Reading Spaces in the Rural Heartland, 1876-1956*, University of Iowa Press. (=2012, 川崎良孝・川崎佳代子・福井佑介訳『メインストリートの公立図書館—コミュニティの場・読書のスペース・1876-1956』京都図書館情報学研究会。)
- 吉田右子・川崎良孝, 2009, 「アビゲイル・ヴァンスリックと図書館史研究」『図書館界』Vol.61, No.1, pp. 2-15.

